

羽鳥ルツ作 「未来世界 バック・トゥー・ザ・バイブル」

< 前編 >

(効果音)

(未来。コンピューターなどの機械音)

所長

今日はひとつ、人間の未来についてディスカッションしよう。この先、日本、世界はどうなると思うかね？

研究員 A

そうですねえ。所長、わたしは現在の 5 つの大陸洲が統合されて、念願の世界合衆国が誕生すると思います。共通の言語と共通の教育、そして共通の思想によって、民族間のいざこざや、人種差別のない一つの国家が生まれ、完全な平和がやってくるんじゃないでしょうか。

研究員 B

いや、完全な平和なんてのは来ないよ。ほら、科学がどんどん発達していくだろ。そうすれば、人口増加と地球資源の減少に伴って、宇宙に目が向けられていくのは当然で、宇宙進出。まあ、今だって火星に移住が始まっているけど、更にそれが広がったら、それをよく思わない宇宙の生物が戦いを仕掛けてきて、宇宙大戦争、なんてことになりかねないよ。

研究員 D

ええ。半世紀も前に先祖たちが想像したことが、実現するってわけね。

研究員 C

何も科学の力を外に向けなくたっていいじゃないか。生活にもっと生かしていけばさ。生活だけじゃない。医学にだって、どんどんもっと取り入れれば、生活だってもっと楽になるだろうし、寿命も伸びる。

所長

そうだな。ガンだってエイズだって、今じゃ簡単に治る時代だしな。おい、田崎君はどう思うかい？

田崎美久

わたしは…。

美久ナレーション

わたしは田崎美久。21 世紀に入った年、2001 年生まれの 21 歳。世界平和維持研究所の研究員。この研究所は、最新のコンピューターを駆使して、世界をどのようにすれば平和に保てるかを研究しているところなのだ。わたしは、この仕事に誇りを持っている。だって、世界の平和はわたしたちの手にかかっているんだもの。わたしたちの頭脳と、最新のコンピューターによれば、なんだってできる、そんなすばらしい仕事なのだ。

美久

わたしは、人間を“理性”の動物として、更に発展、向上させていけば、争いも戦いもない、精神的にも物質的にも水準の高い生活が送れると思います。

所長

そうだ、そのとおりだ。人間はまだまだ未熟だ。人間のよくない心や記憶が感情というものをつくる。その感情が争いの原因となったり、科学の発展を妨害したりするのだ。例えば、“昔、この人に嫌なことを言われた”という記憶によって、その人を憎み続けるという感情的な行為が起こるのだ。それが発展してケンカになったり、なんてのはよくあることじゃないか。これは小さなことだ

が、国家間においてだって同じことが言える。だから我々は人間の心や記憶をコントロールして平和をつくり出す…。

- 三浦真一　　ちょっと待ってください。わたしはそうは思いません。心や記憶をコントロールすることが、平和の道であるはずがありません。神様が、人間に心や記憶する機能を与えてくださったんだから、それを抹消することはよくないことです。これは人間を大切にしない行動であるばかりか、神を冒とくする行為です。
- ナレーション　　そう言ったのは、同じ研究所員で、1年先輩の三浦真一さんだった。クリスチャンらしいとは聞いていたけど、やっぱりそうだったのか…。いまどき、神を信じる人は希少価値なのだ。
- 所長　　は！　いまどき、この科学万能の時代に、神なんぞ信じているやつがいたとはなあ。そういうね、君みたいな宗教かぶれの人こそ、感情を極力コントロールして、理性的に生きることが必要なんだよ。
- 三浦　　お言葉を返すようですが、所長、わたしはそうは思いません。こんな、科学と人間理性万能の時代だからこそ、わたしたちには神への信仰が必要なんです。さもないと、人類は自ら滅びてしまいます。
- 美久モノローグ　　へえ、こんな人もいるんだ。でも本当に平和は、わたしたちがやっているようなことでは実現しないのかしら。そんなことないわよ。いいえ、あつてたまるもんですか。今は遺伝子工学が進んで、人間のよくない資質を遺伝子から取り除くことだってある程度できるようになったし、今度はわたしたちが心や記憶をコントロールすれば、人間の中の悪はなくなる。そうすれば世界が平和になる。すてきじゃない。こんなやりがいのある仕事はないわ。わたしたちがやろうとしてることは間違っていないのよ。
- 所長　　おい、田崎君。何一人でぶつぶつ言ってんだ？　君には「記憶」を担当してもらう。半年後のサミットで研究発表できるよう、すぐプロジェクトにかかってくれ。
- 美久　　はい。頑張ります。
- ナレーション　　わたしは、三浦さんの言葉を聞いてわき起こってきた疑問を振り払うように、自分を力づけ、研究に励んだ。
- (効果音)
- 美久　　(コンピューター音など)
- 美久　　「記憶」というのは、過去に経験した事柄を何らかの形で保持し、必要に応じて思い出して利用する脳のメインアクションの一つです。モニターを見て。これが脳の断面。そしてこれが神経細胞。大脳皮質だけでも140億あるんです。泣いたり、笑ったり、怒ったり、そういったすべての刺激でこの細胞は成長して、枝を出して他の記憶と結びついて、脳の中で精密な回路を作るんです。そうしてできた回路がその人の持つ「記憶」になるんです。大脳のデータファイルですね。

研究員 A それで、記憶をコントロールするには、どうするの？

研究員 B お、いきなり本題ですか。

美久 うん、まず一人一人の脳のCTスキャンのデータに基づいて、その人の「人格」や「感情」を形成したと思われる主要記憶を、コンピューターのサイコリアライザーで分析するの。これは案外簡単。そしてその分析結果を基に、その記憶の神経回路 SMR、スーパーマイクロラジウム光線を使って、一本一本破壊するんです。

研究員 C それは人体に影響はないのかい？

美久 それは大丈夫です。脳のどの部分が何を記憶しているかは、ずいぶん前から知られていることだし。そうそう、半世紀も前に、生きている人の脳にある刺激を直接与えると、音楽が聞こえてくる、といった実験もされているんです。以前聴いた音楽の記憶が、その人の脳の中で実際の音として再生されるのね。今は、細かくどの神経回路に何を記憶しているか、はっきりと数字で知ることができるし、ラジウム光はマイクロ単位でのコントロールも容易だから、関係のないところまで破壊してしまうこともないし、人体にはまず影響ないと言えるでしょうね。

研究員 A じゃあ、神経回路を切断したことで、記憶の中で空白な部分ができちゃうんじゃない？

美久 1つや2つの出来事だったら大丈夫だし、長期間の記憶を消去した場合だったら、こちらで作成したストーリーを埋め込めば OK.。それが本人の記憶となるわけですよ。

研究員 B 完べきじゃん。

所長 田崎君。よくそこまでやってくれた。実験も進んでいるようだし、人体に対する安全も確認された。サミットまであと2か月。そろそろ実用化していつてみてはどうだ？

美久 ありがとうございます。

ナレーション 人の記憶を自由自在に操ることができる。それはわたしにとってとても魅力的で、やりがいのある仕事だった。ただ、あの時三浦さんが言った「心や記憶をコントロールすることは、平和の道ではない」という言葉が、いつもわたしの中で繰り返し繰り返し思い出されていた。でもなぜそうなのか分からないまま、わたしはその実行に着手したのだった。実験対象となったのは、富田茂君という7歳の男の子で、母親とともにわたしのところにやってきた。

養母 この子は、6か月の時にわたしのところにもらわれてきました。健康状態も精神状態も極めて良好でした。とても明るい子で、普通の子よりおしゃべりな子でした。でも5歳の時からプツリとおしゃべらなくなってしまう、それどころかよくかんしゃくを起こし、物に当たるようになったんです。

美久 分かりました。これから何が原因でそのような行動をとるようになったか、コンピューターで分析します。

ナレーション わたしは、自分がやろうとしていることに誇りを感じていた。“この不幸な子を助けることができる。この子の人生を、この手で変えることができる。”そんな誇らしい気持ちでいっぱいだったのだ。

美久 分かりましたよ、お母さん。茂君は、5歳8か月23日目に、あなたが本当の親でないことを知りました。覚えておられないかもしれませんが、あの日、茂君は、おなかを壊して幼稚園から早引けして、あなたが実のお母さんと電話で話しているのを聞いてしまったのです。茂君は、その時、あなたにだまされた、裏切られたと感じたようです。それで、あなたに対して心を閉ざしたんですね。

養母 そうだったんですか。この子は知っていたんですか。それでもわたしは本当の子供のように愛してきたのに…。

美久 愛していたとしても、茂君がその時受けたショックを覚えている限り、物に当たる、という行動はやまないでしょう。

養母 どうしたらよいのでしょうか。

美久 ご安心ください。これからこのお子さんの5歳8か月23日目から今までの記憶の神経回路を破壊、消去します。そして新しい記憶、そうですね、例えば幸せな家庭を描いたストーリーを植えつけます。ここにストーリーのサンプルがございますから、好きなものをお選びいただきます。ご自由にそれに手を加えることもできます。

養母 え？ あのう、今までの記憶を残したまま治していただくことはできないのでしょうか？

美久 そうすると、記憶がダブってしまうことになります。メモリー・ミキシングは研究されていますが、脳細胞抗体反応のため、現段階では不可能ですね。

養母 では茂は、この子は一体どうなるのですか？

美久 心配ありません。人体には影響ありませんし、このお子さんの問題のあった以前の人格が成長して今に至るといった形になります。

養母 いえ、そうじゃなくて、今、ここにいるこの子です。しゃべらなかつたり、物に当たったりするこの子です。わたしはそれらもすべて含めて、この子を愛しているんです。しゃべらなくなつて、物を壊したつて、この子はわたしの子なんです。この子は一体どこへ行ってしまうんですか？ ここへ来るまでは、“最新の医学で、この子の自閉症と乱暴が治るものなら”と思ってました。でも、わたしは嫌です。そんな、この子の人格を殺してしまうような治療だったら、わたしは今のままのほうがずっと幸せです。

ナレーション わたしは、頭をガンと殴られたような気がした。わたしは世界に真の平和をつ

くり出すために、この研究を進めてきたはずだった。でもわたしは、目の前の小さな一つの家庭さえ幸せにできないのだ。それどころか、わたしがやろうとしてきたことは、人間を、かけがえのないその人自身を抹殺することだったのだろうか？ 幸せとは、平和とは一体何なのだろう。わたしは何もかも分からなくなってしまった。その時、またもわたしの心には、あの三浦さんの言葉が響いてきた。

三浦 (エコー)心や記憶をコントロールすることが平和の道であるはずがない。心や記憶をコントロールすることは、人間を大切にしないばかりか、神を冒とくすることだ。(多重エコー)

美久 主よ、助けてください。

ナレーション だれもない研究室に一人残されたわたしは、生まれて初めて、神に助けを求めて、うずくまるように、ひざまずいたのだった。

<後編>

(効果音) (シンセサイザー・コンピューター音)

美久 (祈り)神様、助けて！ わたしは自分の仕事で人を殺そうとしています！

ナレーション 私の名前は田崎美久。2001年生まれの21歳。わたしは世界平和維持研究所の研究者で、世界の平和について研究している。半世紀くらい前だったら、平和と言えば、戦争が起こらないだとか、経済的に豊かになるとか、テレビのバラエティー番組が増えるとか、そんな表面的なことを見ていたけど、今は違う。もっとメンタルなこと、心とか記憶とか感情とか、そんな人間の内面まで掘り下げて、そこから人類の究極のへーを生み出す方法を研究しているのだ。わたしは「記憶制御」の担当だ。その人の人格形成に不必要な、または有害な記憶を抹消して、新しい記憶を植え込み、そうすることによって、より完ぺきな人格をつくらうというようなことをやっている。でもわたしは、そのことが本当に平和のためのものか、自身がなくなってしまうのだ。クリスチャンの三浦さんが言った言葉が気になって気になって...

三浦 (エコー)人の心や記憶をコントロールすることが平和の道であるはずがありません。神様が人間に、心や記憶する機能を与えてくださったんだから、それを抹消することは、神を冒とくする行為であるばかりか、人間を大切にしない行動です。

ナレーション わたしは急いで研究所からうちに戻った。うちの物置の古い書棚に、確かあの本があったはずだと思い出したからだ。

美久モノローグ もしかして、あの本に三浦さんの言っていた神様のことが書いてある。もしかしたら、そこに本当の平和について、何か書いてあるかもしれない。

ナレーション それは聖書だった。何でもわたしの祖母が、熱心に読んでいたのだそうだ。

期待と不安と恐れが入り混じったような気持ちで、わたしは必死で探した。

美久 聖書、聖書…。ないわ。

ナレーション 聖書がそこになかったことに、わたしはすごいショックを受けた。

兄 おい、お前、こんなところで何探してんだ？

美久 え？ あ、お兄ちゃん。あのね、聖書をちょっと…。

ナレーション わたしをバカにしたような兄の言葉が返ってくるだろうと予想していたわたしに、兄の返事は思いがけないものだった。

兄 ああ。あの古いやつか。あれはこの間おやじたちがもう要らないと言って、ほかの古本と一緒に処分しちゃったよ。だけど聖書なら、おれ、フロッピーで持ってるぞ。お前のコンピューターでも使えるやつだから、貸してやろうか？

美久 あ、ありがとう。

ナレーション わたしは驚きつつも、自分の部屋に跳んで戻ると、早速コンピューターに、今かりてきたばかりの聖書をセットして、語句の検索を始めた。

美久 へ、い、わ。(効果音)(キーを打ち込む音)ひえー！ いっぱいあるよ。「主権と恐れとは神のもの。神はその高きところで平和をつくる。」うんうん。よし、音声出力にしよう。(ピツという切り替え音)

男声 (機械音)「わたしはまたその地に平和を与える。」「わたしは、あなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。主のみ告げ。それは災いではなくて、平和を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

美久モノローグ 神が平和をつくり、それをわたしたちに与える。それは素晴らしいものなんだ。…わたしたち、何とかして究極の平和を、って頑張ってきた。だけど、ひょっとして、その方法が、根本的に違ってたんじゃないかな。

ナレーション わたしは、続けてずっと「平和」の語句に聴き入っていた。そして、ある箇所の言葉にクギ付けになった。

音声 「主のみ手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。あなたのとがが、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪がみ顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。…彼らは平和の道を知らず、その道筋には公義がない。」

美久モノローグ わたしたちのとが？ わたしたちの罪？

ナレーション 気づいたら、わたしは三浦さんの研究室に向かっていた。

美久 (息を切らせながら)ぬえ、三浦さん。教えてほしいの。この前三浦さんが言っていたのは、何なの？ どういうことなの？

三浦 え？ 急にどうしたの？ 一体何のこと？

美久 ごめんなさい、いきなり。ほら、この前、人の心や記憶をコントロールするのはよくないって。

三浦 ああ、あれはね、こういうことだ。人間は神様によってつくられた。特別な存在としてね。心が与えられたのも、はっきりとした感情が与えられたのも、人間だけなんだ。神様は人間を完全なものとしてつくられて、心や感情を与えられた。それなのに、人間がせっかく与えていただいた心や感情を、自分の利益だとか、よくない動機で使うものだから、要するに、本来よいものを悪く使ってしまうから、そこにいさかいや争い、更には戦争が起こり、平和がなくなってしまうんだよ。

美久 だから、そのよくない感情を取り除こうと…。

三浦 感情自身はちっとも悪いものじゃない。問題は、人間の心の奥深くにある罪だ。

美久 「あなたがたの罪がみ顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。…」

三浦 あれ？ 聖書の言葉じゃない。よく知ってたね。

美久 うん。三浦さんの言葉が気になって、コンピューターで調べてみたの。

三浦 そうなんだ。やっぱり科学者、やることが違うね。その罪というのは、まことの神を神として認めないこと、そして、自分を神とすることなんだ。

美久 自分を神とする？

三浦 自分は何でもできる、何でもしていいって思うことだよ。例えば、美久さん、君のやっていることだって、人の中の悪を神様に取り去っていただくとは考えずに、人の力でどうにかしようと考えているだろ？ 我々は、人の感情を植え替えたり、除いたりすることはできるかもしれない。でも、何かをしようとする意志や、感情も含めた人の心、魂そのものを、心をつくり変えるのは神様の領域なんだよ。

美久 でも…。

三浦 考えてごらんよ。美久さんのやっている研究が進めば、きっと人間は、自分たちに都合のいい記憶を人に植え付けて、自分に従順な人間をつくるとか、そんなふうに使い出すんじゃないかな？ ダイナマイトだって、始めは人に危害を加えるものとして作られたわけじゃない。

美久 じゃあ、どうしたら平和になれるの？ わたしもう分かんない。

三浦 平和をつくれる方、神様が自分を愛してくださっていることを認めるときに、その愛が、僕たちを平和にするんだ。

美久 神様の愛が平和をつくる…。

三浦 そう、神様抜きにして平和は語れないよ。

ナレーション そう言って、三浦さんはわたしにイエス・キリストの十字架の話をしてくれた。

研究生C あ、田崎さん、ここにいた。この前いらっちゃった、茂君のお母さんが見えてるよ。

ナレーション わたしは、その声にはっと我に返り、慌ててその人のところに向かった。

美久モノローグ 何の用かしら？ 何かまたわたしたちのやり方が気に障ったのかしら？

美久 こんにちは。あの...、何か...。

養母 (うれしそうに)聞いてください。あの子が、ずっとしゃべらなかつたあの子が、しゃべったんです！

美久 どうして？...一体何があったんですか？

養母 あのあと、あの子がどのようにしてわたしのところにもらわれてきたか、それをどれほどわたしたちが喜んだか、そしてどれほどあの子を愛しているか、ゆっくりと時間をかけて話したんです。そしたら、あの子が、一筋の涙を流して、そして「ありがとう。ごめんなさい」と言ったんです。

ナレーション これだ、とわたしは思った。母の愛が、凍った子供の心を溶かし、平和を生み出したのだ。茂君が、かたくななその心に母の愛を受け入れた時に、平和が訪れたのだ。わたしは初めて三浦さんの言ったことが分かったような気がした。

美久モノローグ 人を、人類を平和にするのは“愛”なんだ。しかも中途半端な愛じゃない。完ぺきな愛なんだ。神様がわたしたちを愛し、あのイエス様の十字架によって、罪を赦し、平和を与えようとしているのに、わたしはその神様を無視して、自分の能力や機械に頼ってきた。そして、自分の手で人間をコントロールしようなんて、神様を恐れない、とんでもないごう慢なことをしようとしていたんだ。ああ神様、ごめんなさい。

ナレーション わたしは急いで三浦さんのところに戻った。

美久 分かったわ、三浦さん。わたしがどれほど、人間に対しても、神様に対しても、ひどいことをしようとしていたか。こんなわたしでも神様は赦し、愛して下さるかしら。

三浦 ああ、もちろんだよ。

所長 (アナウンス)田崎美久さん。至急所長室に来てください。田崎美久さん、至急所長室に来てください。

美久 何かしら？ まあでもちょうどいいわ。所長にもこのこと話さないよ。

三浦 そうだな。間違っていることは間違っていると、ちゃんと言わなきゃな。

美久 行ってくるわね。

ナレーション わたしは、いつでも神様が愛していて下さることを感じながら、所長室に向かった。

美久 (ノック)失礼します。お呼びでしょうか、所長。

所長 田崎君。わたしは記憶をコントロールすることについて、実用化の着手を命じたはずだが、どうなっているんだね？

ナレーション わたしは、富田茂君親子に起こったことや、神様のことについて話した。

美久 所長。わたしたちのやっていることは、平和につながらないばかりか、人を傷

つけ、神を侮ることなんです。

所長 神だって？ 神だって、田崎君？ 君までそんなことを言い出すのかね？

美久 平和をつくれるのは、罪のある人間ではなくて、きよい神様なのです。

所長 もういい。聞きたくない。君はしばらく自宅で待機していなさい。

ナレーション それでもなお、わたしの確信は揺るがなかった。それから2週間後、毎日聖書を読みながら、待機しているわたしに、解雇通知が届いた。

美久モノローグ あーあ、クビになっちゃった。でもすっきりした。これで、本当の意味で平和のことが研究できるわ。

兄 おい、美久。三浦さんて人から電話だぞ。

美久 もしもし、美久です。

三浦 (フィルター音)美久さん。クビになっちゃったんだって？ 悪いな、僕のせい
で。

美久 何言ってるのよ。あなたは真理を教えてくれたんじゃない。お礼が言いたいぐ
らいよ。

三浦 (フィルター音) 冥はね、僕も辞めさせられたんだよ。

美久 え？ なあんだ。だったら、これから2人で真の平和について研究して、一人
でも多くの人に教えてあげましょうよ。

三浦 (フィルター音) そうだね。もう相手は、コンピューターや実験データじゃないぞ。
聖書だ。

美久 そう。人の心を変える神様のみ言葉ね。

三浦 (フィルター音) ああ。“バック・トゥー・ザ・バイブル”だよ。

ナレーション わたしの心の中に、今まで味わったことのない喜びがわき上がってきた。きつ
とそれは、神様が与えてくださった喜びだろう。
21世紀に生きているわたし。科学万能のこの世界で、人間の心も制御しよう
ともがいていたわたしは、今やっと暗やみの中に光を見いだした。わたしは、
このわたしをつくり、生かしていただく神様のもとに帰る。この心の中に、
まず神様との平和を取り戻すのだ。“バック・トゥー・ザ・バイブル”。そこから、
わたしの本当の未来世界が始まる予感がある。

< 完 >